

東カロリンに於ける巨石遺跡（豫報）

八幡 一郎

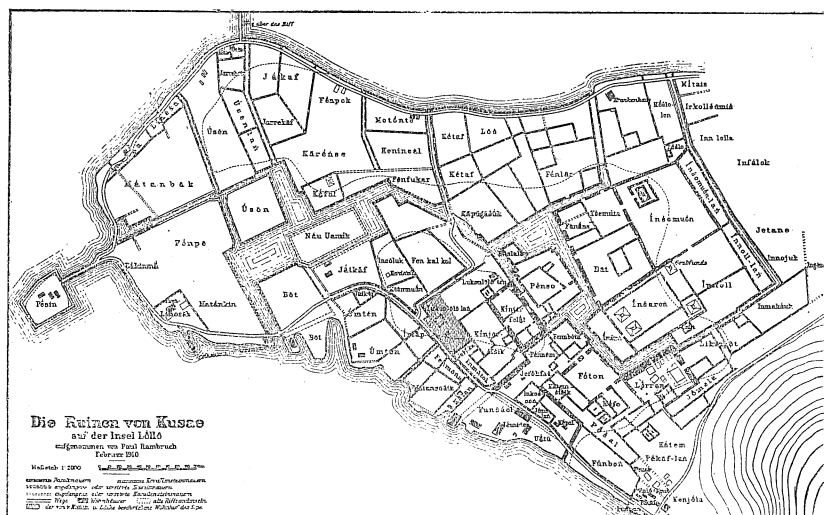
一 クサイ島の巨石遺跡

カロリン群島の東端クサイに一つの巨石遺跡が存することは早くより知られてゐる。それはクサイ本島に接するレロにあり、巨大な玄武岩と珊瑚礁片とを積上げて壁となした大規模な遺構である。

レロはクサイ本島の東岸に位置し、東西に長い橢圓形をなす小島で、その大いさ僅か東西一哩南北半哩に充たない。東半は小高い山となり、西半は低平で、こゝに該遺跡が存するのである。

クサイは人も知る如く一八〇四年、*Captain Crozer* に發見されて以來歐人の訪れる者決して少くなかつたが、之に注意して記載したものは餘りない。一八八〇年に *Otto Finsch, Franz Hensheim* 等一八九六年に *F. W. Christian*、一九一〇年にハンブルグ民族博物館から派遣せられた南海探検隊一行が詳しく之を報じてゐる。就中ハンブルグ南海探検隊は同博物館太平洋部長 *Dr. E. Sarfert* 以下 *Peilo* 號に乘組みて來島し、種々人類學上の調査を試みたが同探險隊員 *Dr. Paul Humburch* はレロ

東カリンロに於ける巨石遺跡



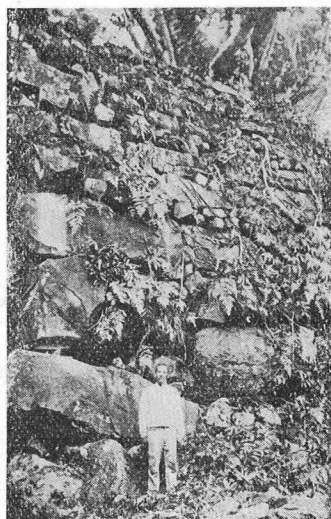
第 1 圖　　レ　口　遺　跡　(Sarfert)

遺跡調査を擔當し、徹底的に之が研究を遂行した。余は昭和四年東北帝國大學教授長谷部言人博士と同島に
 到り、親しく此遺跡を踏むことが出來た。

同遺跡は第1圖の中、太黒線を以て示す Kinjer felat, Ponso, Panama, Bat, Insomnon, Insaron, Imoll, Instra, Lorrar, Kefo, Faton 等の名を以て呼ばれる諸地域を中心^{カネール}に展開し、その間に奥深くまで一種の水道が作られてゐる(圖版(4))。その内規模の宏壯、整然たるは Kinjer felat 及び Hershaim, Christian 等もこのみを圖示し又は踏査實測して居る。方形にして長軸百九十四呎、短軸百十呎ある。今茲に Christian の實測の結果を掲げやう。西(東北)角に於ける壁の高さは二十五呎、西北(東北)に面する壁の脚下に浅い水道^{カナール}が入つて來てゐる。水道に沿ふて七十二呎の距離の所に、滿潮時の潮を防ぐ爲の小形の石で設けた近世の障壁があ

る。この障壁を越へると幅七呎の入口がある。その部分の壁の高さは十六呎ある。時々顛落した玄武岩柱の破片が壁脚に散らばつてゐる。壁は風雨、樹木の爲に其頂上を破壊せられ、高低一樣でない。

入口から四十呎程の所に玄武岩の巨大な平石が積込まれてゐるが、その長さ九呎六吋、高さ二呎四吋、幅三呎六吋に達する。水道の幅は九呎ある。之に接する部分の壁の厚さは十五呎である。この點から五十呎にして幅十五呎の第二の入口がある。此門から十呎で、巨大な榕樹の生茂つてゐる北(東南)隅に



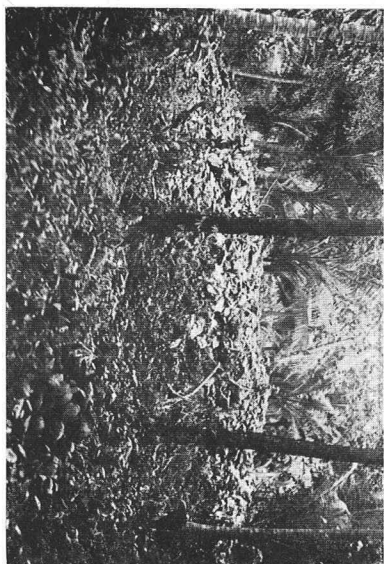
第 2 圖
レロ遺跡の一部 (Christian)

達する(第2圖)。この榕樹の根が盛んに壁を破壊する。其無數に垂下がる枝が間隙と云ふ間隙に根を張り、北東の貿易風が吹く時などは壁を揺り動かす。加之根を張るに従つて壁の構造に狂ひを生ぜしめ石を弾き出すのである。北角の壁の高さは前面に於て二十六呎ある。この部分には長さ九呎、

幅三呎六吋、高さ三呎を數へる大きな五角形の玄武岩が角石として用ゐられてゐる。枝の水道が東北(東南)壁に沿ふて四呎の幅に入つて來てゐる。その水道は高さ五呎に築かれた壁堤をもつてゐる。北(西南)角から二十二呎程の所に第三の入口がある。その幅五呎、其部の壁の高さ十五呎である。更に

圖版説明

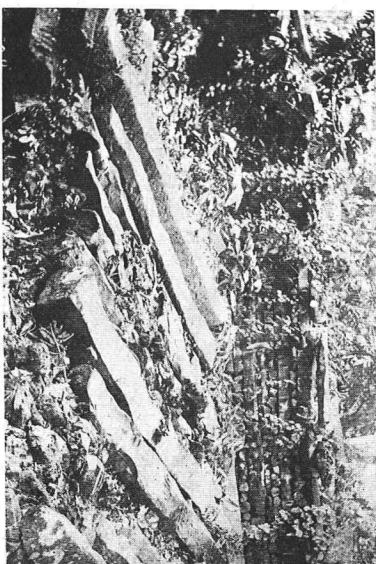
- (1)レロ遺跡の墳墓 (2)ナンマタル遺跡ナンタウアス正面 (3)ナンマタル遺跡の墳墓 (4)レロ遺跡水道の入口附近



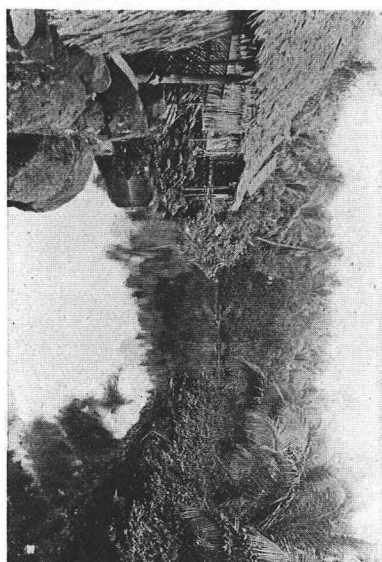
1



2



3



4

二十呎にして第四の入口に達する。それから五十呎で東(西南)角に達するが、そこには徑三呎六吋、高さ三呎十吋、長さ六呎二吋の角石がある。同所の壁の高さは約二十呎である。東南(東南)側の壁に沿ふてヒュスクスの藪が繁茂して仲々見透しがつかない。その側の壁は荒廢甚だしく、壁の高さも八呎から十五呎の間で不同である。壁に囲まれた域内は、内部が低い珊瑚礁塊の壁で二つの部分に仕切られ、椰子、榕樹、イクソラス等が密生し、その下には丈なす雜草が生茂つてゐる。最後に南(西南)角に至れば、高さ三十呎程あり、最も高い部分となつてゐる。その地上二十呎の所にある一角石は長さ十呎、高さ四呎、幅二呎六吋ある。壁の脚には三つの丸い大きな玄武岩柱を積上げ、その最下のもの長さ六呎、高さ四呎、厚さ三呎を算する。以てその規模の壯大なるを知るであらう。(右の内括弧内の小字は Christian の方位の誤りを正したものである。)

他の諸區劃は左程は大きくないが、玄武岩柱、珊瑚礁塊で壁を環らすことは同一制である。Insaron, Imoll, Insomon には合計五基の墳墓があり、曾ては Kafai と呼ばれる區劃にも之を存したと云ふが今は廢絶してゐる。ハンブルグ探檢隊は五基の内二基を發掘し、余も亦未發掘の二基を發掘することが出來た。外部は珊瑚礁片をピラミット形に積上げ(圖版(1))、その内に玄武岩柱を組み、上方の開いた長方形石槨(第4圖)を設けたもので、その底は一般地面の砂地に達して足る。天井には玄武岩柱を並べて蓋し、槨内には珊瑚礁片が詰めてある。之を除去して底に近くなると砂層中に人骨及其副葬品

が存する。

而して各區劃の石壁には諸處に入口通路が設けられ、時には水道に向つて開き一種の舟懸り場ともなつてゐる。壁は幅廣でその上を通行出来る様な部分もあり、隈角は物見臺の如く廣く高い臺をなし

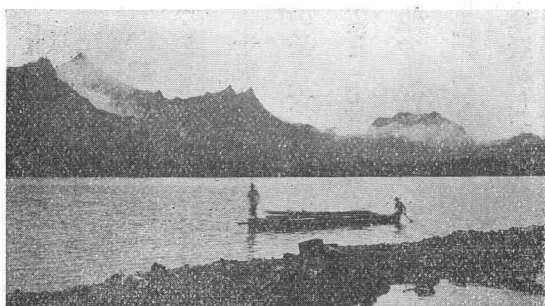
てゐることもある。又壁の内側に幅廣な段が設けられ、それが内庭に向つて恰も棧敷狀をなしてゐる所もある。庭内には時には玄武岩柱を

平らに敷並べて床を作つた部分、或はカバ酒を造つた臺石などがある。

石材はクサイ本島（第3圖）各所に産するから、そこから運搬し來つたのである。

レロの島には永くクサイに君臨した主長一族が住み、支配者は常にこの遺跡内外に居を構えて居たと云ふ。

二 ポナベ島の巨石遺跡



第 3 圖 レロよりクサイ本島を望む

ポナベ島東海岸の一島、タモンに接する珊瑚礁上の淺瀬にもナンマタルと呼ぶレロの如き遺跡がある。此遺跡は一種の人工島とも云ふべきで、規模壯大にして風光明媚なる所から、早くより南海のベニスと喧傳され、ポナベに立寄る程の遊客は必ず此處を探るを常とした。

ボナベ島が一五九五年歐人に發見せられてより、十八世紀から十九世紀にかけて、來航する者多く、測量又は學術調査に従事した學者は尠くない。けれどもこの遺跡に就ては亞米利加布教團の Dr. L. H. Gulick が初めて注意し、後 Johann Stanislaus Kubyry が一八七三年頃精密な研究を遂げて報告す



第 4 圖 石槨の墳墓の古レロ

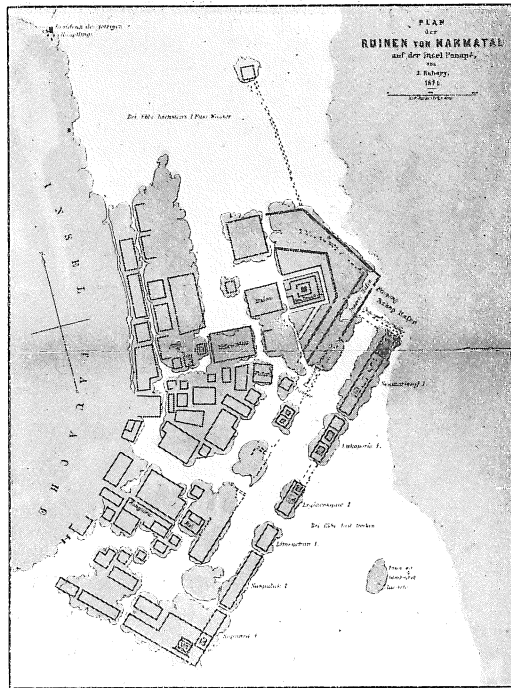
るまでは殆んど歐羅巴に知られなかつた。一八八九年 Frederick Moss 一八九六年 Christian 等相次ぎて此處を訪れ、或は測量し、或は發掘したのである。

タモンの島の周圍に發育した珊瑚礁は廣い淺瀬を作り、その周縁には現在尙ほ盛んに之が成生を見、その淺瀬を取巻いて一種の堡礁を作つてゐる。

從つて外海の激浪は此堡礁に遮られて、遠く遺跡附近に及ばず、靜穩なること内灣の様である。而して遺跡の位置はマタラニーム灣とボナテツク灣との中間に當つてゐる。

遺跡は五邊形乃至六邊形の巨大な玄武岩柱を無數組合せて四角形の區劃を作り、之に珊瑚礁、砂などを詰めて平坦にしたもので、斯かる區劃即ち人工島の數は約八十を算へることが出来る。しかもこの島は總面積四一七、九二六平方米に互る淺瀬上に略一定の規矩の許に營まれ、整然たる水邑の感を

與へるのである。島の形は大體方形を原則とするが、まゝ長方形、不整形のものもある。大いさも亦區々であるが、大約一邊の長さ十八米から二十米餘の方形が多い。長方形なるものには幅九米、長さ



第 5 圖 ナンマタル遺跡 (Kubary)

べ、その上に又石の列を之と直角に長軸方向を置き、交互に積上げて行くのである。部分的に崩れてゐるが、大體原狀を保つてゐる。斯かる積方はレロに於ても見られる。

各島の高さは大約一・五米乃至一・八米で、満潮時に獨木舟を纜り、上陸するに適した高さである。

四十米の如き小規模のものから、幅二十米長さ百三十五米に達する大規模のものもある。そして相隣る各島は相互にその縁を平行ならしめ、その間に幅九米から七十二米までの距離があつて、そこに満潮時の海水が湛える（第5圖）。各島を形成するに當つて、玄武岩柱は自然の素材をその儘無雜作にしかも端然と積んである。其積方は最下に石の小口を出す様に水平に置き並

島に入つて見ると珊瑚礁を詰めて平坦にし、表面所々に歩行に適するやう玄武岩が鋪並べてある。草

木が一帶に繁茂し、爲に自然に土壤が生じて島の基盤を掩蔽し、普通の陸地に等しくなつてゐる。

この區域の外縁には恰も防波堤の如く細長い外廓が作られ、東側北西部、南西部には夫々水門が設けられて外海と通することが出来る。水門附近は凡そ厚さ九米、高さ九米位の壁となつてゐる。

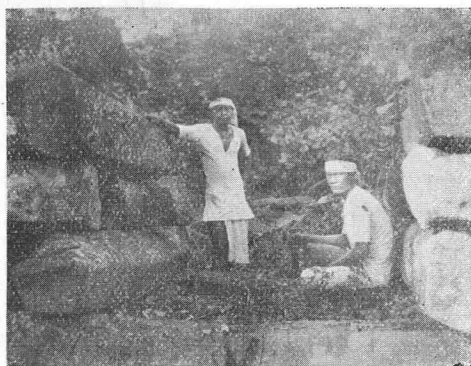
島の各所には住宅址の形迹が認められるだけであるが、次の諸島には其上に玄武岩柱で大きな構築物を成してある(第6圖)。

Nanguta, Itel, Nannorilesaj, Iukoporin, Legineongari, Lim-
enekau, Nampulak, Kapuned, Nam Tanuoz.



第 6 圖 ナンマタル遺跡一部 (Christian)

夫等構築物の中央には玄武岩柱もて造つた石室があり、墳墓となつてゐる。發掘して人骨及副葬品を得た事は一再でない。斯かる墳墓を有するもの、内最も有名なのはナンタウアス Nan Tanuoz であらう。その規模の宏壯な所から全遺跡の中心をなすが如く見らる(圖版2)。Kubary の測量した結果を録すると次のやうである。高さ五、六呎、長さ三四三呎、幅二二三呎ある大方形島の上に玄武岩を



第 7 圖 ナンマタル遺跡の一部

(第7圖)所には殆んど必らずあると云ふてよい。

右の外政廳の存せし所と傳ふる一劃や、祭祀を行つたと傳ふる墳丘の存する一劃があり、又大規模な敷石、浴池、カバ造の石など隨所に見られる。石材はポナペの南部ジョカージより齎らしたと傳へられる。同處には玄武岩の絶壁が巍然として聳えてゐる。

三 兩遺跡に關する諸説

積上げた高い圍壁が周らされてゐる。圍壁は長さ二一二呎、幅一八一呎、高さ二五—三二呎、厚さ一〇呎あり、前方に幅一四呎の入口通路がある。こゝを入ると更に一重の圍壁がある。之は第一のよりも小規模で、高さ一五呎、長さ一〇〇呎、幅八〇呎、厚さ六呎あり、前方には幅一〇呎の入口通路がある。この入口通路を入ると廣い内庭があつて、その中央には有名なシャウテレウル家最後の王の墓と傳へられる整然たる石の墓室がある。第一の圍壁と第二の圍壁との間は廣場となり、その左右に夫々一基づゝの墳墓(圖版3)がある。斯かる墳墓は石の構築物が設けられた

上記レロ及ナンマタルの遺跡の築造に就いては種々なる憶説が行はれてゐる。その二三を紹介しよう。



第 8 圖 ナンマタル墳墓の發掘

レロの遺跡が古く漂流渡來した日本人によつて營まれたものであらうとの意見を古く出したのは F. W. Christian である。クサイ島民が、之を作つたものは北方から來た強力の間人であると傳承して居ること、機織其他のものが日本南部のものに似てゐると云ふ誤信から出發した考へで餘り根據はないのである。この考方は可成り流布して今日も尙跡は絶たないのみか、在住日本人は之に種々の附會を試みつゝある。けれどもそれは取るに足らない。

サイバンのナンマタル遺跡に關しては西班牙の海賊が構築した砲壘の跡であらうとの憶説が行はれたことがある。之は一八三九年ラルネ號が西班牙の大砲を發見したと云ふ風説に基づいたもので Kuby, Christian が共に否定して居る。

次に兩遺跡は曾て陸上にあつたものであるが、基盤が沈降によつて海面下に沒した結果、通路に滿潮時の海水が侵入し、一種に水邑となつたと解する説がある。Charles Darwin はビーグル號の航海

に参加し、珊瑚礁に關する研究に關聯して、太平洋諸島の隆起、沈降現象に就きて調査した。その結果彼はカロリン群島が沈降臺地に當ることを指適した。Dana は之と同じ意見を有ち、ウィルケス探検隊員 Horatio Hale 等の蒐めた資料によつて現在も沈降を續けつゝあつて、遺跡が水中に沈んで行くと思ふのである。Kubary, Christian は等しくこの説を否定し、最初から水邑として築かれたものであるとした。堡礁内の淺瀬は絶間なき土砂の流入、海藻の繁殖、貝類の死殻の爲に淺くなつて満潮面に迫り、一方遺跡内の水路もマングローヴ、水草其他の植物の密生に防げられて全體へは満潮が通せず、次第に涸渴しつゝあるのであるから、構築當時から沈降し續けてゐるとは到底考へることは出来ない。

右の如き所説は枚舉に達まない程ある。けれども兩遺跡が水邑として、兩島現住民の祖により構築されたものなることは多くの學者の認むるところである。

四 太平洋洲に於ける石造構築

自然石材を用ひて或場所を構築する風習はポリネシア一帯に擴がつてゐる。然るにメラネシアでは一部分を除いては殆んど之を見ない。メラネシアに於て比較的顯著なのはフィジー及びバンクス諸島であり、トレス諸島、ニューヘブリデス及びソロモン諸島中のイサベル等にも散見するが、孰れもメラ

ネシアの東縁に位置し、ポリネシアに接してゐる點が注意される。斯かる風習を馴致、助成せしめる最大の條件は、所要の石材が手近に得られる土地（島）たることである。従つて隆起珊瑚礁の島々はこの條件を缺き、火山島に於てのみ可能だと云ふことになる。この條件に適當する島嶼はポリネシアよりもメラネシアの側に多い。されば石材構築が後者に顯著でないことは、環境が然らしめたのではなく、夫々が屬する文化が系統を異にするためと考へられる。斯くて石材使用の風習は太平洋洲に於てポリネシア文化に屬するものと見做し得べく、メラネシア東邊に行はれるのは其影響とすることが出来るのである。

用石は島によつて必ずしも一致せず、玄武岩・凝灰岩等得易きものを採る。板石を用ひることもり、柱狀のものを用ひることもある。夫等の組合せ方も、用石の種類並に形狀、技術の巧拙、使用部位によつて一律でない。ポリネシア全般としては自然のまゝの石材を利用してゐるが、島によつては夫と併行して加工した切石を使用してゐる。其例はトンガ・サモア・ツブアイ・マルデン・ファンニング・マルケサス・ンシエテ・イースターアイランド等に知られてゐる。茲では斯かる技術上の點はさして重要でないから詳述することを避けやう。

石材を使用して構築するのは凡そ次の如き部類である。

(一) 牆 壁

(四) 窖・室・豎坑

(二) 臺場及地壇

(五) 階段

(三) 通路

(六) 石像

右は夫々構造部分であつて構築物の目的により種々なる組合せ、配置をとるのである。

構築物中主要なのは、堡砦・儀式場・埋葬地等である。是等はすべて集團生活の中心であり、従つて互ひに結びついてゐる場合が多い。

トンガ島民は堡砦築造に最も長けて居つた。けれどもその方法はフィジーの影響を受けたもので、濠と柵とからなつてゐるが石を用ひた形迹がない。George Brown は、サモアでは堡砦として高さ四呎から六呎の石壁を設け、殊にマノノ島民は長さ五哩に亘る島の周圍に高い防壁を作ることを記載してゐる。ソシエテ諸島民は稀に砦を設けるが餘り石を用ひないらしい。ツブアイでは階段狀に作つた丘陵の頂に堡砦を作り、石の胸壁と濠を設けた例のラバ島にあることが報せられて居る。マルケサスには各所に避難所程度の石の堡砦が遺つて居る。ハワイにも僅か乍ら濠を伴ふ石の胸壁がある。以上の外にはその存在が知られて居らず、従つて餘り普遍的なものと云ひ難い。他島との距離の關係が争鬭非常に供へる施設を必要としないからでもあらう。島内部族間の争鬭絶ゆることなきクツク諸島でさへ堡砦の設けのないことは、同じポリネシアにあり乍らフィジーに近いトンガ・サモアに於て堅固な砦を作る風ある事實と共に、堡砦築造の風習が元來ポリネシア的のものでなく、メラネシア方面よ

りの部分的影響とも見ることが出来る。

聚落の内部又はその近傍に、聚落民の集合所として廣場を設ける風習はポリネシア一帯に擴がつてゐる。そして斯かる風習はミクロネシア或はメラネシアにも存するが、ポリネシア移住民の齎したものと解されてゐる。廣場には屢神聖視される石の造營物があり、そこは一種の聖殿のごとく考へられてゐる。James Cook に據ればトンガに於ける神聖なる造營物は地表より十六呎乃至十八呎高く長方形に築かれた上に存し、之を圍んで高さ三呎程の石の壁が繞らされて居つた。長方形に築かれた丘は綠色の芝を植詰め緩傾斜をなしてゐる。その頂に祠堂がある。丘の正面には二つの石櫓が頂に向つて設けられてゐる。丘は密林の中に設けられてゐるが、前方公道に面した所だけは樹木なく、草地になつた廣場がある。この廣場は五本の道の集合點になつてゐる。而して William Mariner 等に従へば祠堂の下には酋長一族の墓所として石の窖が存することである。サモアには等しく祠堂あり、酋長等の集會所となつてゐる。そして又幾軒かの家には祠堂と同様神聖なる杜が有り、そこで祈禱し犠牲が供へられる。上記と大同小異の場所は探検家、學者等によりサモア・ハーバー・ソシエテ・アウストラル・パウモト・イースターアイランド・ハワイ・ニュージールランドに存することが報せられてゐる。

其通有性質は主長等の墓所が團體信仰の中心地となり、特定の祠堂を設くるに至り、神聖なる地と

してダブーされる。この神聖地は墳丘や祭壇（ピラミット）を中心に石牆を繞らし、鬱然たる杜を作つてある。それ等は多く石材によつて構築される。そして城内には一軒乃至數軒の神聖なる家があり、酋長、祭祀者が起臥し、神像や祭祀に關係ある品々を管理してゐる。

けれどもポリネシアの南北に於て石材構築に多少の相違がある。即ちその中央部から北部にかけては巨石を使用する風があるのに南部は之を缺き、南部から中央部にかけては、北部に見られない板石の坐臺を祭祀儀式の爲に設ける風習が存する。Edward S. Hardy は之を異る文化層に由來する信仰と關聯する所の對蹠的性質であると唱へる。中央部では兩者が種々なる程度に組合せられてゐる。

五 總 括

クサイ及ボナベに存する巨石構築物は構造、規模に於て幾分の相異はあるが、共に玄武岩柱、珊瑚礁塊を以つて方形乃至之に準ずる區劃或は牆壁を設け之を多數布置せしめ、いづれも水邊に位置せしめて舟行の便を考慮し、且區劃内には高貴の墳墓・祭壇・集合所等あり、共に主權者等の常住せりと云ふ所傳すらあつて、著しく共通する性質が彼我の間に認められるのである。墳墓中より發見する副葬品の類も全く同種品に屬し、共通せる文化を享けたる者の建設に係ることを暗示してゐる。然らばミクロネシアの他の島々に斯かる遺跡があるかと云ふに、現在までの所では殆んど絶無と考へて差支

へない。クサイに近きマーシャル群島の多くが隆起珊瑚礁の島であり、石材に乏しき爲か未だ其痕跡すら聞かないのである。

メラネシアでは其東縁ポリネシア寄りに多少乍ら石造物があるが、その主體部には之を缺く。然るにポリネシアには巨石構築の風が極めて盛んである。而して其構築を見る場所は多く社會の中心であり、酋長、祭祀者等支配階級の墳塋、住居が必らず附隨し、祭壇・舞踊廣場があり、之を圍んで墻壁、聖林の存することを通則とするのである。是等の諸性質はクサイ、ボナベの諸遺跡と極めて強い類似を示すものと云ふべく、従つて東カロリンの巨石構築物はポリネシア殊にその北部文化と親縁關係を有せずやと思量される。東カロリンの過去及現在の文化要素中種々なる點に於てポリネシアの夫に合致するもの尠くない。巨石構築の風も亦、強固なる支配階級制度の形態と共にその一つの現れと見るべきであらう。

只クサイ、ボナベの夫は水邊、水上に位置するが、ポリネシアには未だ斯かる位置を特に選定した例を見ない。又クサイ、ボナベの如く宏壯なるはポリネシアに見ざる所である。且つ發見遺物中にはポリネシア的なものを含んでゐる。更に兩遺跡にして堡砦的意義を有するとせばメラネシアへの顧慮を要するであらう。今後一層の考究を要する。

參考主要文獻

Christian, F. W.: The Caroline Islands. 1899. London.

Friederichsen, L.: Die Ruinen von Nammatel auf der Insel Ponapé. 1874. Hamburg.

Hardy, C.: Some Conclusions and Suggestions Regarding the Polynesian Problem. American Anthropologist, Vol. 22. P. 226. 1920.

Jantou, R.: Archaeology of the Marquesas Islands. 1927. Honolulu.

Sulzer, E.: Kusae, I Halbband. Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908—1910. II Ethnographie: B. Mikronesien Band 4. 1919. Hamburg.

On the Megalithic Structures of Kusae and Ponape.

Ichiro YAWATA

On the eastern coasts of both Kusae and of Ponape are preserved the megalithic structures for which these places are noted. The megalithic structures in these two places resemble each other in various ways; the artifacts from them being very similar. The inevitable conclusion is that they are the work of people of the same culture. Stone structures are found all over Polynesia, especially in the central and northern parts of the group. They mark the centre of the social activity of the islanders and also the sacred precincts.

The ruins found in Kusae and Ponape resemble the Polynesian stone structures, suggesting some cultural kinship. Many cultural elements of the Eastern Caroline islanders resemble those of the Polynesians, and the megalithic structures are probably examples of it. It is to be noted, however, that the stone ruins of the eastern Carolines are either situated near the sea or rise from it. In these respects they differ from the Polynesian. Some artifacts discovered there are not of Polynesian type. These are significant facts in the problems concerning the relations of the two types.